

令和 6 年度 第 1 回スマートシティモデル事業等推進有識者委員会 議事概要

日 時：令和 6 年 9 月 2 日（月） 10:00～12:00

場 所：合同庁舎 2 号館 共用会議室 1（Web併用）

※資料に基づき説明がなされた後、下記の意見交換がなされた。○意見交換【スマートサービスの効果検証について】

（効果検証の精度）

- インプットに対して効果がダイレクトに結びつかない効果検証項目もあるので、効果検証の精度向上が必要。事業に対するインプット以外の要因が多く存在する場合、マクロレベルの状況変化がないかなど、事業以外の要因を考慮したうえで効果検証した方が良いのではないかな。
- スマートシティの取組を始めた当初はデータを取得しアプリに繋げるという内容が主で、その後は課題解決型で考えるべきであるということで推進してきた。最近では第 3 フェーズに差し掛かっていると考えており、効果検証の対象を絞り込むのではなく、都市全体を評価・モニタリングする体制を評価するべきではないかな。

（人材育成）

- 人材育成の観点も重要であり、行政やまちの事業者等にデータを使いこなしている人材がどのくらい育っているかという指標もあると良い。人材育成が進んでいないと事業が継続しないと考える。
- 中長期的に取組を実施した場合、人材育成を怠っていると事業が伸びなくなることにも把握できる。人材育成も含め事業の全体を把握できる枠組みにすると、後から取組に関わる人も全体感を捉えながら取り組むことができるようになる。このようにデータを元に考えていくサイクルを評価するべきではないかな。

（都市ビジョンの実現に向けた効果検証）

- 都市ビジョンを見据えて取組を進めることは重要であるものの、都市ビジョンに対する効果検証は短期間で結果が現れるものではないため、都市ビジョンについては定性的な評価や課題抽出に留めてはどうか。
- スマートシティ実装化支援事業で支援した取組と、都市ビジョンの実現に向けた効果は因果関係が明確ではないことを踏まえると、「都市ビジョンの実現に向けた効果検証」については無理に実施する必要がないのではないかな。
- ロジックモデルにおける上位の都市ビジョンに近い項目になるほど、他の要因の影響が大きくなり、実施した取組と効果の因果関係が薄れてしまう。都市局としても、効果検証項目の指標値だけを見るのではなく、効果検証結果を踏まえて実施主体が十分にネクストアクションを考えられているかを評価することが重要ではないかな。

- 都市ビジョンに関する効果は短期的に評価することには適さないが、全体的な視点で見たときに、現在実施している事業がどの位置にいるかを認識できるという意義がある。また、都市ビジョンに関する効果は定性的に評価するべきであるという意見も出ているが、取得できる定量データに基づき定量評価をしないとそもそも定性評価もできないのではないかな。
- 対象事業の直接的な効果を検証し、都市ビジョンについては他の事業と連携しながら成果を上げていることを定性的に表現できないか考えるとともに、効果検証の出口戦略をどう位置付けるか検討する必要がある。

【デジタル情報活用推進コミッティについて】

(広域連携・分野間連携)

- 河川の防災等スケールメリットのある分野についてどのように進めていくか、「デジタル情報活用推進コミッティ」において、広域連携についても考えなければならない。
- 小規模な地方公共団体では必要に迫られて分野横断での取組を実施することが可能。一方で比較的大きい地方自治体では分野ごとに部署が分かれてしまうため、連携が難しくなる。都市ビジョンの実現を目指して全庁的に取組を進めることで、分野間連携を目指しやすくなるのではないかな。

(ニーズとシーズのマッチングについて)

- スマートシティに取り組む参画団体に対して、インセンティブを感じられるような要素の幅を示すことが重要ではないかな。
- 過去の好事例を分析した結果、ニーズに対する解決策となる情報を導き出す際に、元のシーズにあたるデータからその情報に至るまでの情報変換のステップ数が多いほど、革新的で効果の高い好事例となる傾向にあることが分かった。ニーズとシーズの間を埋める人材を育成し、そのような人材に肩書を与えて役割を明確にするべきではないかな。
- たとえばシビックテックコミュニティではオープンデータを使ってコンテストを開催している。ニーズとシーズの間をつなぐ人材を発掘する方法の一つとして、コンテスト開催のような取組も考えられる。想定と異なる分野からアイデアが出てくることも面白いのではないかな。
- ニーズとシーズの間を埋めるアイデアの創出方法として、生成 AI や大規模言語モデルを活用することの検討も必要ではないかな。

以上